

道産ダケカンバ製バットを開発

あきつひろし
秋津裕志さん

昨年9月、日本のプロ野球公式戦で初めて使われた道産ダケカンバ製バットを開発した道立総合研究機構林産試験場（林産試、旭川）の研究主幹。北海道日本ハムの田中賢介選手が現役引退までの最後の半月間、握り続けた。「田中さんの引退まで5本もヒットが出た」と喜ぶ。大阪生まれ。信州大卒業後、住宅メーカーに就職。木に興味を持ち、京都大学院で学び、1993年に林産試入りした。広葉樹のカンバ類は生命力が



強く、道内の森林資源量の1割を占めるが、多くはパルプ用チップとなる。ギターなど楽器の材料に活用しようと2016年、京大と共同研究を始め、ダケカンバには強度があり、バット材に使われる輸入材のハードメープルに近いことが分かった。「同じ樹種でも部位や節の有無、年輪の入り具合で強度が異なる」。毎日のように角材や試作バットを金づちでたたいて振動数などから強度を解析。複数のプロ選手に試してもらうち中、「試合でも使える」と評価してくれたのが田中選手だった。田中選手の要望で堅くて重めの角材をえりすぐって10本を仕上げ、プロデビューを果たした。

昨年春には家具職人らとシラカバの利用促進を図る「白樺プロジェクト」を立ち上げ、旭川で毎年開かれていた家具・木工の大型展示会に出品するなど「カンバ類の可能性を広げたい」と情熱を注ぐ。ダケカンバ製バットを利用する後継プロも募集中の59歳。

(山村晋)